

白浜町沢辺遺跡における古代製塩関連資料

神野 信

1. 沢辺遺跡の概要

房総最南端の白浜町に所在する沢辺遺跡は、海岸沿いを東西に帯状に伸びる標高16～20mの海岸段丘上に立地する(第1図-1)。この海岸段丘は、大きく4面あり、地質学的に「沼面群」として知られ、突発的な地殻変動による隆起とその後の海蝕の繰り返しで形成されたものと考えられている。沢辺遺跡が立地する段丘は、この段丘群の上位面、「沼Ⅲ面」に相当すると思われ、北の後背には屏風状にそそり立つ海蝕崖が丘陵地と画している。また、この段丘面も海蝕と丘陵・海蝕崖下から流下する小河川によって開析された小谷で複雑に分断されており、舌状に取り残された段丘面上に遺跡が立地している。なお、沢辺遺跡の西に伸びる段丘上には、沢辺遺跡とほぼ同時期の青木松山遺跡(第1図-2)、東の段丘最上位面に古墳時代前～中期の祭祀遺跡・小滝涼源寺遺跡(第1図-3)が所在する。

沢辺遺跡は、圃場整備に伴って2000～2001年に発掘調査が行われ、弥生時代後期から中世に至る遺跡で

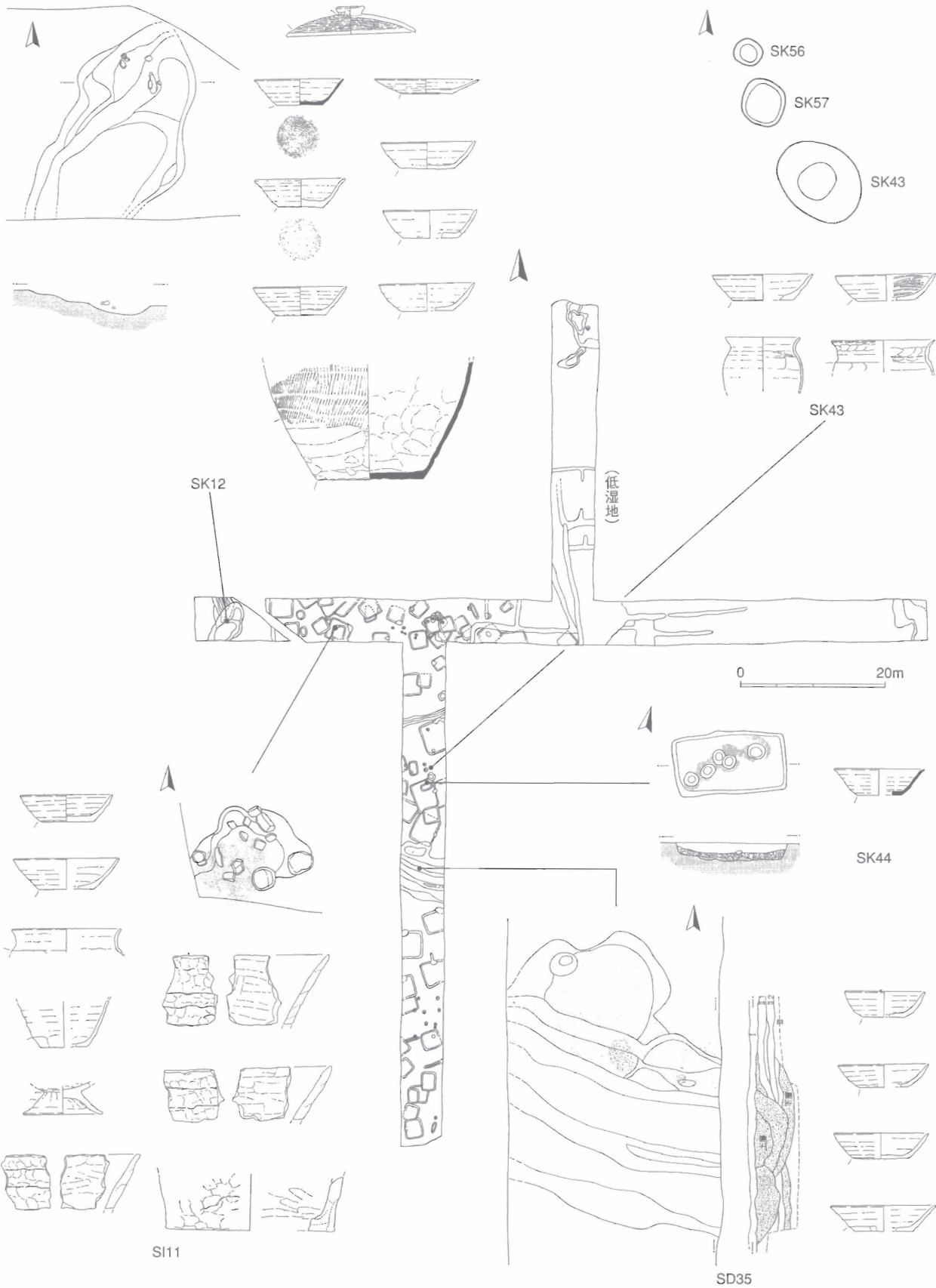
あることが確認されているが、本調査は限定された範囲で実施されたことから、必ずしも遺跡の全体像は明らかになっていない。しかし、その調査成果からは、古墳時代中期・後期後半～平安時代の竪穴建物跡・溜井状土坑から構成される集落遺跡が中心をなすものと考えられ、安房地域における海浜立地の集落遺跡の姿を髣髴とさせる、多大な資料が得られている。その中で、注目されるもののひとつとして、報告書において「平底鍋形土器」と仮称した一群の土器が挙げられる(神野他2003)。

この土器は、人為的に破碎されたような細片で出土し、接合・復元が困難であったため、正確な器形・サイズは明らかでないが、器肉が1～2.5cmと厚く、底径20cm以上の平底で、体部から口辺部にかけて緩やかに外傾した、桶形あるいはバケツ形を呈していたと思われる。

この種の土器については、類似すると思われるものが夷隅地域の太平洋沿岸の遺跡において確認されており、既に製塩土器の可能性が指摘されている(寺



第1図 遺跡位置図(1/25,000)



縮尺) 遺構 : SI11 = 1/40, SK43·44·56·57 = 1/80, SX12·SD35 = 1/160
 土器 : 1/8

第2図 「平底鍋形土器」 関連遺構

門1986)。しかし、それらは発掘調査によらない断片的な資料であったこともあり、これまで所属時期・全体像が全く判らず、その性格を確定させるまでに至っていない。その土器が沢辺遺跡では、遺構に伴って多量にまとまって出土し、実質的に初めて所属時期・形態や性格を検討する材料が得られたといえよう。しかし、報告書においては、十分に資料を提示し、検討を加えることができなかったことから、製塩土器の可能性を認めつつ、その性格の断定を避けている。

この様に、この種の土器は断片的に出土し、資料提示も困難であることが多いことから、報告されない(出来ない)場合も多々あったように思われる。そこで、ここに再度資料提示することで、この種の土器の問題点を明らかにし、今後の類例の増加を期待するものである。

2. 「平底鍋形土器」の出土状況

「平底鍋形土器」は、調査区西のSX12・SI11, 南のSD35においてまとまって出土している(第2図)。

SX12は、長軸約6.3mの不整楕円形をなすと思われる、深さ約1.2mの楕円形の掘形を呈する大形土坑である。湧水の激しい旧河道の層を掘り込んでいたほか、覆土下層において黒色粘土が厚く堆積しており、開口して滞水した状態にあったことを示していることや、土坑北端に足場状の段・礫があることから、溜井状の水場跡と考えられる。また、埋没の過程で多数の土器や貝・魚骨・獣骨が投棄されたような状況で出土しているが、この中に「平底鍋形土器」も含まれる。「平底鍋形土器」は、土坑西側から覆土上層に流れ込むような状態で、4,548点124.5kgがまとまって出土している。

方形竪穴建物跡のSI11は、攪乱等によって遺存状態はよくないが、その内部の北壁寄りに円形のカマド状遺構が検出されている。そのカマドの構築材として、「平底鍋形土器」の大形破片が用いられている。なお、SI11の竪穴北東隅にもカマド状の焼土・礫の集中部があること等から、この円形カマド状遺構はSI11に重複する別個の遺構の可能性もある。

SD35は、遺跡内を西から東に流下する溝(流路跡)で、度重なる土石流状の洪水による埋没と再開析を繰り返している。覆土上層において「平底鍋形土器」が214点8.9kg出土している。

これらの遺構から出土する土器は、遺存状況や水場跡・溝という遺構の性格上、混入品も多いと思われ

るが、ほぼ共通した様相を見せており、ロクロ土師器杯・須恵器杯を主体に、いわゆる武蔵型小型甕や下総産と思われる須恵器甕・甌等が加わる。土師器杯は、口径・底径比等から9世紀前半のものを中心とすると考えられるが、SX12では一部これより後出的な形態の土師器・須恵器杯や土師器皿も含まれる。SX12では、「鍋形平底土器」が覆土上層においてまとまって出土していることから、その所属時期を後出的な一群との関連で考えることもできるが、いずれにしても「鍋形平底土器」は9世紀代、その中でも中葉以降のものの可能性が高い。

なお、竪穴建物跡群が展開する範囲の東縁、低湿地部分との境においても遺構外から多量の「平底鍋形土器」が出土しているが、磨耗等が見られないことから、低湿地部分に廃棄されたものと思われる。

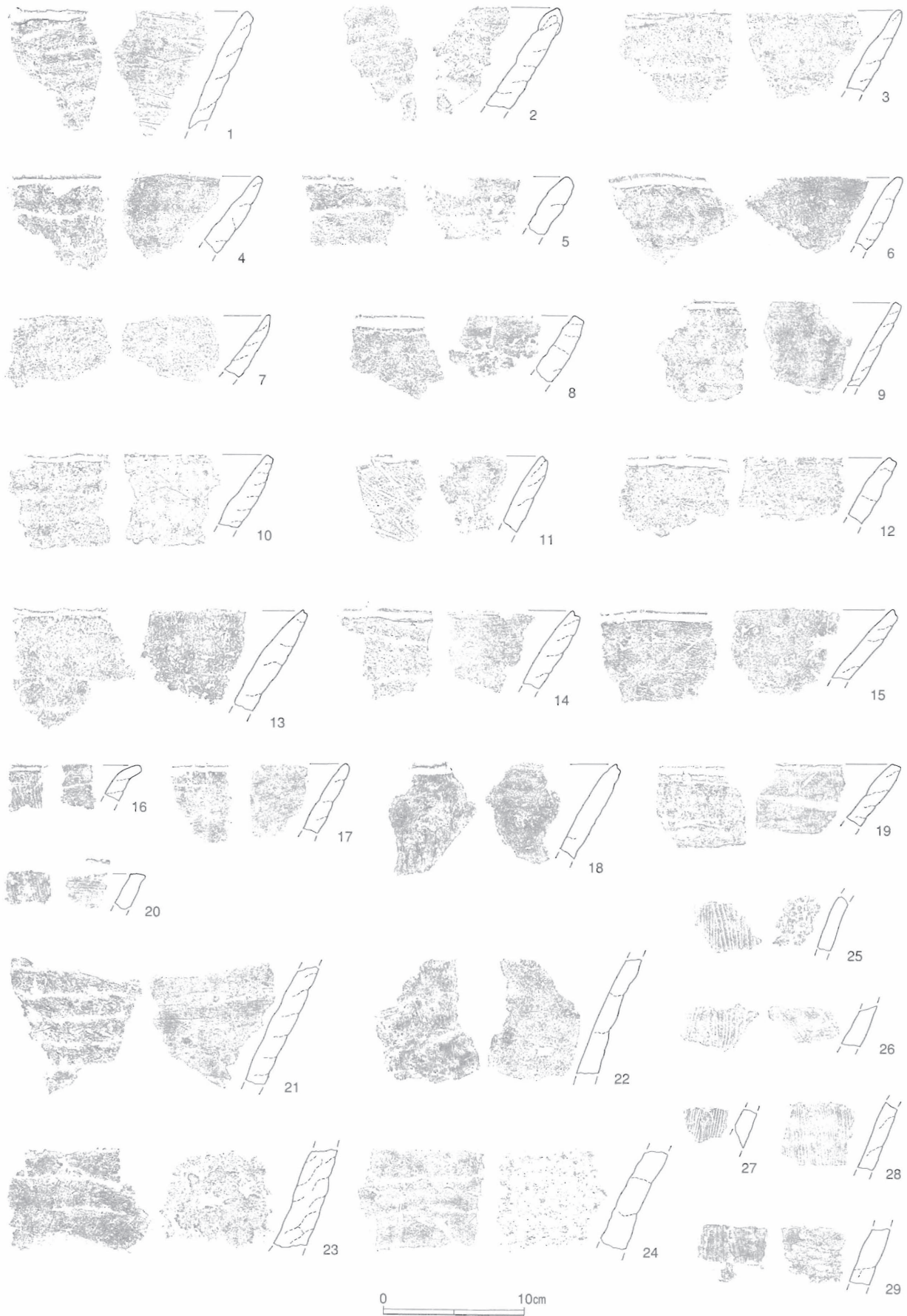
3. 「平底鍋形土器」資料紹介

「平底鍋形土器」の胎土には細密な粘土が用いられているが、全体的に練り等の調整が甘いようである。そのため、白色針状物や貝殻細片、白灰色泥岩片を含むものがあるが、均一に混入していない。焼成は良好で、明茶褐色を呈する。

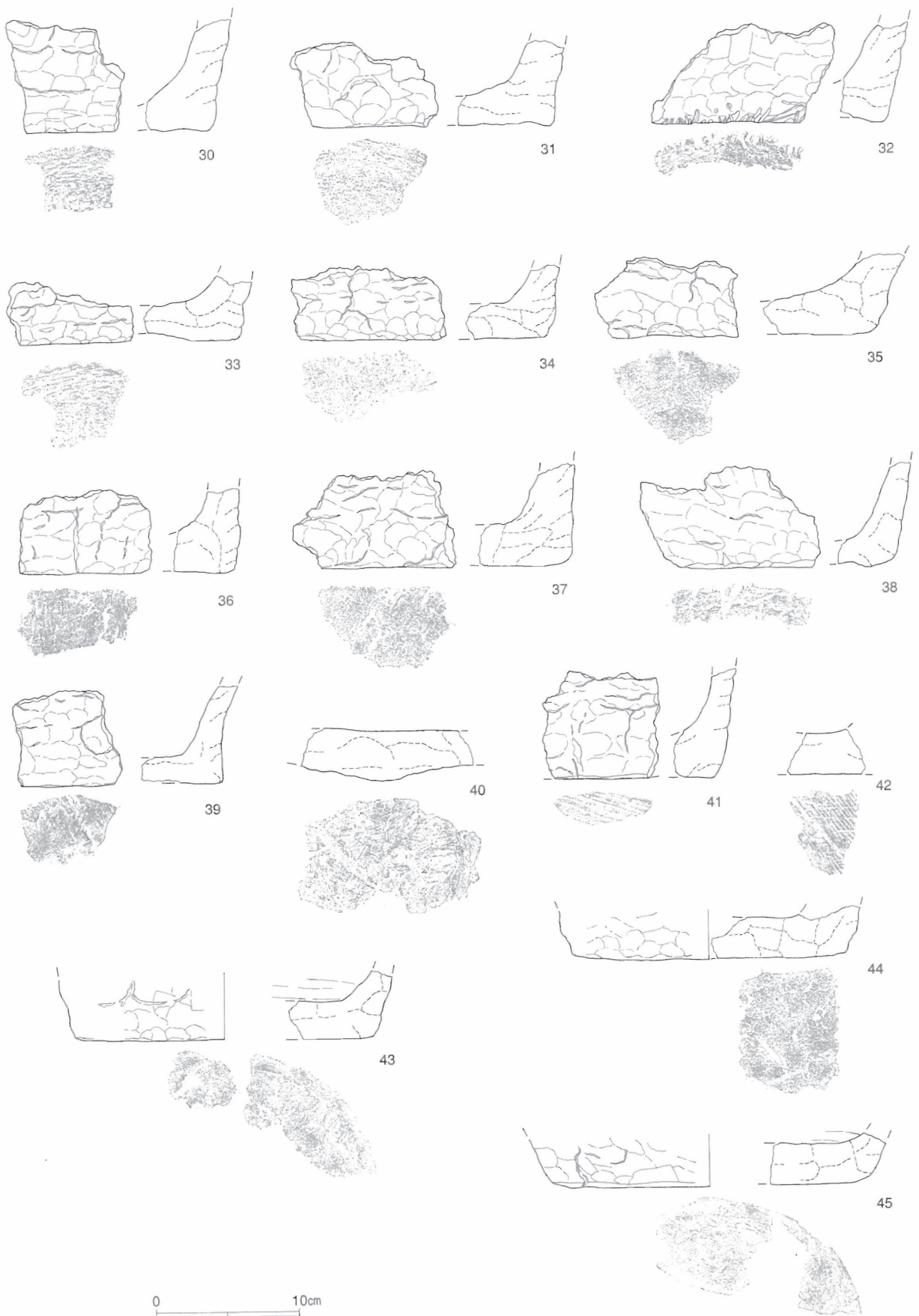
第3図-1はSI11, 2~16はSX12, 17~19はSD35, 20は青木松山遺跡出土の口辺部資料である。形態は、緩く外傾して開くと思われ、口縁部端を成形時に鋭利なヘラ状工具で切り、面取りがなされている。この中には口縁部端の内側が外に突き出し、端面に沈線が巡るように見えるものがあるが(8~19)、これは整形時、内面に横方向の指あるいは布によると思われるナデを巡らせたことによって、胎土が外に引き出されたことによる。これに対して外面の整形方法は、粗雑な指による不規則なナデ、指頭圧を加えるに止まることから、外面に粘土紐痕を残している。なお、口縁部端が丸くなるものも見られるが(2・3)、これらはナデが端面にまで及んだもので、意識的なものではないと思われる。

第3図-21~27はSX12, 28・29は3区低地部から出土した体部資料である。口辺部と同様、外面には粗雑な縦方向のナデが入り、粘土紐痕を残すものが主体を占めるが、ごく僅かにハケナデが見られる(16・20・25~29)。内面の整形も横方向のナデが巡るが、器面が黄白色化し、劣化・剥落しているものが多い。

第4図-30~40・43~45はSX12, 41・42は3区低地部から出土した底部資料である。破片資料から



第3图 「平底鍋形土器」拓影图 (1)



第4図 「平底鍋形土器」拓影図(2)

推定される底径は20cm以上で、器肉は2.4cm前後である(43～45)。底面には、縄蓆圧痕を残すものと平坦なものが認められる。平坦なものは、板等の平坦面上で成形したものであろうが、特に調整を加えた痕跡が見られないものが多い(34～37・39・43～45)。なお、明確な調整としては、縄蓆圧痕を指でナデ消しているものがある(38・40)。また、2点のみであるが、静止糸切り離し痕の可能性のあるものが認められる(41・42)。内面には、口辺～体部と同じく横方向のナデを入れるが、黄白色化し、器面の劣化が激しい。これに対して、外面は確かに被熱しており、煤けた様に黒色化したものがあるが、強い被熱による赤色化あるいは器面の劣化が特に顕著とはいえない。

4. 問題点

先に述べたように、この種の土器の性格については、早くから製塩土器の可能性が指摘されているが、沢辺遺跡例では土器外面の被熱痕跡が特に顕著でないことから、報告書では断定していない。しかし、今回紹介した資料と同様の形態・製作技法等の特徴を持つ土器が、若狭湾周辺地域以北の日本海沿岸と松島湾周辺地域以北の太平洋沿岸の製塩遺跡から出土していることや(近藤1984・近藤他1994)、内面に見られる黄白色化・劣化を重視し、鹹水の煎熬による結晶塩生成に伴う「使用痕跡」とみなして、ほぼ製塩土器と断定してよいのではないかと考える。この場合、これまで疑問点とした被熱痕跡については、土器底を直接炎に当てるだけでなく、カマド天井内に埋め込む構造や、排煙熱を利用する方法等も考えられることから、今後は製塩炉・カマド構造が問題となってくるとと思われる。

沢辺遺跡において、「平底鍋形土器」出土遺構とほぼ同時期の遺構としては、長方形土坑SK44・円形土坑SK43・円形カマド状遺構SK57が挙げられる(第2図)。SK44は、長軸1.6m×短軸0.9mの長方形土坑の対角線上に、径約30cmの炉跡が5基並び、覆土中に多量の炭化物を含む。その北に隣接するSK43は、径約1.2mの播鉢状の土坑内に多量の炭化物・焼土が堆積しており、SK44の付属施設と考えられる。

そのSK43・44の北側に位置するSK57は、径約0.6mの円形土坑の床面に粘土を貼り、外縁に礫を巡らせており、SI11の円形カマド状遺構とほぼ同じ構造を見せている。

残念ながら、これら遺構群と「平底鍋形土器」を

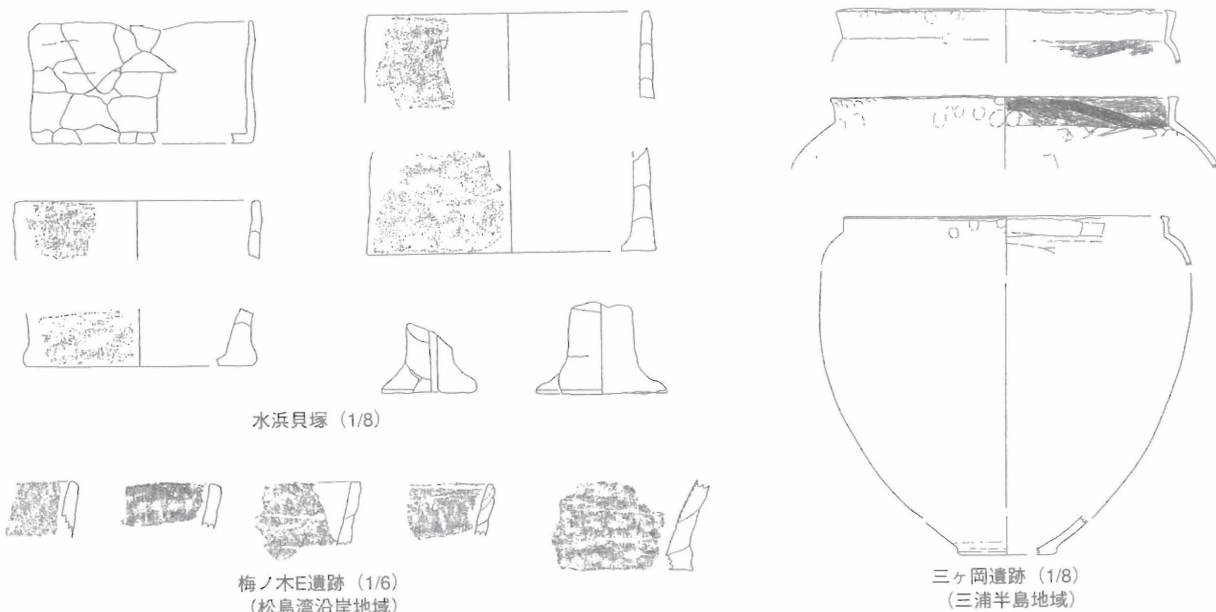
直接結びつける材料はない。また、遺構の構造だけでなく、覆土の炭化物・灰・焼土を水洗選別した結果、SK43・44では混入の可能性のある動物遺体が若干出土したのに対し、SK57からはイワシ類等の小型魚の遺体が多く検出されたことから(樋泉2003)、遺構の性格も異なると思われる。しかし、この中に製塩に関連する遺構が存在する可能性があり、類例の有無を含めて検討の必要がある。

最後にこの製塩土器の技術的な系譜であるが、同じタイプの輪積み痕を残す大型の平底の製塩土器は、先にあげたように8～9世紀に北陸～東北地方の日本海・太平洋沿岸に見られ、現段階では沢辺遺跡・青木松山遺跡例が太平洋側における南端域にあたるようである¹⁾。関東地方において他に古代の製塩土器とされているものについては、三浦半島地域の「類製塩土器」があるが(諸橋1991・1994)、胴部が張った甕形をなし、「平底鍋形土器」とは形態・成形・整形技法等が異なっている(第5図)²⁾。なお、現状で房総半島の古代製塩が時期的にどこまで遡るのかは不明である。沢辺遺跡の限定的な調査成果では、9世紀代の一時期、比較的短期間に製塩が行われているようで、継続性は窺えない。

以上の現段階で得られた資料からは、東北地方南部、特に松島湾沿岸地域との技術的なつながりを想定することができそうである。ただし、東北地方南部の大型製塩土器は、体部～口辺部が直立気味で、口縁部端面が水平に切り取られる桶形を呈すると推定される等、細かい部分で差異が認められる。また、松島湾地域では薄手で小型の製塩土器や、製塩専用の支脚を伴っているが(第5図)、沢辺遺跡をはじめとする房総半島地域ではまだ確認されない点で、製塩土器の使用方法にも違いがあると考えられる³⁾。

房総半島における古代製塩土器の分布状況も明確でなく、今のところ夷隅・安房地域で確認されるに留まっている(寺門1986・野中他2000)。この地域に分布が集中するとした場合、その背景としては、浜と磯が入り組んだ海浜部の地形とともに、丘陵的地形が海浜部まで迫り、製塩に必要な薪材の供給源となる森林資源(塩山)が近接していたという環境が考えられるが、それ以外の成立背景については、現段階で言及できる状況にはない⁴⁾。

今後は、製塩技術の系譜と構造、製塩の目的(生産主体・供給先等)を明らかにするため、房総半島地域における製塩土器・遺跡を把握することが求められて



第5図 周辺地域の製塩土器

いるといえよう。

最後に今回、追加資料の紹介を快諾いただいた白浜町教育委員会・(財)総南文化財センター、多大なご教示を頂いた菊地逸夫氏・小林信一氏・笹生衛氏に記して感謝申し上げます。

註

- 1) 三浦半島地域においても「平底鍋形土器」に類似した土器が分布しているが(笹生衛氏のご教示による)、資料を確認していないため、詳細については言及できない。
- 2) 「類製塩土器」については、製塩土器とすることに慎重な見解もある(中三川1994他)。その一方で、土器から海棲珪藻遺体が検出された例(諸橋1999)や、葉山町三ヶ岡遺跡で、「類製塩土器」と有機的な関係があると考えられる灰・焼土からも同じく海棲珪藻遺体が検出されたことから、近年は製塩土器とする見解が強化されている(諸橋他2001)。
- 3) 松島湾沿岸地域の製塩土器は、底部外面が激しく被熱・劣化しており(菊地逸夫氏のご教示による)、「使用痕跡」においても差異が見られるようである。
- 4) 松島湾沿岸地域の古代製塩については、古墳時代に遡らず、律令体制の波及とともに成立しているとみられることから、多賀城への供給が目的で成立したと考えられている(加藤1989)。これと同じ製塩技術が房総半島に導入されていた

場合、同様の成立背景を考えることが可能かもしれない。

参考・引用文献

- 加藤道男 1989「仙台湾周辺の製塩遺跡」『研究紀要』第15巻
東北歴史資料館
- 神野信他 2003『青木松山遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書』(財)総南文化財センター
- 近藤義郎 1984『土器製塩の研究』(青木書店)
- 近藤義郎編 1994『日本土器製塩研究』(青木書店)
- 寺門義範 1986「製塩」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会
- 樋泉岳二 2003「第3章第2節3. 動植物遺存体」『青木松山遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書』(財)総南文化財センター
- 中三川昇 1994『小荷谷遺跡』横須賀市教育委員会
- 野中 徹・杉山春信他 2000『千葉県鴨川市東条地区埋蔵文化財発掘調査報告書』鴨川市遺跡調査会
- 長谷川厚他 2001『三ヶ岡遺跡』(財)かながわ考古財団
- 諸橋千鶴子 1991「三浦半島の類製塩土器について」『浜諸磯遺跡』浜諸磯遺跡調査団
1994「I-7 神奈川県」『日本土器製塩研究』(青木書店)
1999「土器から観察された珪藻殻の意味」『利根川』20利根川同人
- 諸橋千鶴子・倉持卓司 2001「三浦半島における土器製塩」『三ヶ岡遺跡 I』(財)かながわ考古財団